

釣れ釣れなるままに

2003年思い出の釣行記 PART. 6

痺れるような



鹿島釣狂

**釣遊会第6回大会
(創立40周年記念大会)**

☆開催日	平成15年10月26日
☆開催場所	浦河港～エリモ港
☆入釣場所	近浦海岸
☆潮	干潮 21:11 23cm
	満潮 03:47 142cm
	干潮 09:22 67cm
☆釣果	カジカ 356 cm 2匹
	ハゴトコ 256 cm 3匹
	重量 2110g
☆成績	合計 823点
	成績 6位
	持ち点 7点
	累計点 20点 (3, 1, 3, 2, 4, 7)



清月 均 后 离 佳

2. 3日前から続いた高波に併せて気象庁が日高地方に雷警報を発令し、雲行きが怪し

い。港内での釣りも予想されるので、釣具店でイソメを購入してから集合場所に向かう。一陣の風が吹き荒れ、土砂降りとなった。先に待機していた嵐氏の車に乗り込み、釣り場情報を漁る。彼も本日の天気予報を考え、日高の海の状況を見てから考えるという。今年のこれまで5回の成績では、彼と私が年間優勝を目指して袂を分かつことになっている。私の入釣場所は初めての挑戦となる近浦であることを告げ、図々しくも嵐氏に教えを請い願う。彼は直接の対戦相手になる私に、豊かな経験に基づく詳細な釣り場状況を快く解説してくれる。

バスに乗り込んだ。本大会は十勝沖地震のために延期していた釣遊会創立40周年記念大会である。阿部会長からは、数々の名場面を織り込んだ釣遊会の歴史が紐解かれ、今大会も期待しているとの挨拶があった。私の心に熱いものがこみ上げてくる。

上近浦に詳しい堀内氏からもその様子を伺う。彼も本日の成績如何では年間優勝争いに割って入る位置にいる。彼は幌島に入釣する予定なので、私のただ1回の頼りない釣行に基づく釣り場状況を伝える。大会範囲の浦河になり、各々が狙いを秘めて釣り場に降り立っていく。下近浦に向かう嵐氏を一人残して、私は近浦で降りた。

近浦海岸は突風が吹き荒れており、街灯に淡く照らし出された波頭が白い飛沫を上げて襲いかかって来ている。航空写真で見ていた掘削場所は、潮が混んで来ているためにその姿を消し、海岸線が見事なほどの一直線になり、遠目で見渡しても釣りになりそうなところは各舟揚場しかない。満潮時でも溝は簡単に見つけることが出来るだろうと鷹を食っていた私の思いは見事に裏切られた。闇雲に竿を振り、浅い岩盤の上に仕掛けが乗っている様は思い浮かべたくもない。

近浦舟揚場の右横に四角いコンクリートブロックの突堤が築かれている。高波が打ち寄せてはいるが、その上を乗り越えることはない。雨は止んでいるが、打ち上げられた波の飛沫が風に乗って、暗雲垂れ込めた空から降り注いでくる。荒れる海を前にしても『優勝』の2文字が頭から離れず、潮水を浴びて身を清め、汚れを落とす潮垢離しおごりの心境である。兎にも角にも、狭いブロックの上から、正面、左後ろ、右横にと方向を変えて打ち終えた。三脚が突風と共に薙ぎ倒された。竿に被害はなかったが、三脚にぶら下げておいたオモリ袋がブロックの下の段に落ちてしまった。取りに降りようかとも思ったが波がブロックを洗っている。たかがオモリ袋の為に命を危険に晒すこともない。最初のウネリが来た時には、その波と共に海中に沈んで見えなくなった。代わりに25cm程のハゴトコが波に揉まれながらやって来たが、それっきりでお仕舞いになった。

紳士を標榜

いよいよ潮が込んできた。突堤の途中にある低いブロックの上を波が乗り越え始めた。その場から慌ただしく撤退する。

上近浦方向に歩いてみる。玉石原を掘削して作った出入り口のない大きなプールは、さすがに波が死んでおり、『北の釣り会』の2名がカジカを持っていた。いつもなら潮の入り

込まないこんな浅海にもカジカがいることに驚かされる。

海岸線に取り残された古いコンクリート階段には、主のいない竿が三脚に立てかけられている。高い胸壁を上がった最初の階段下にも手稲から来た御仁が遠投で早くもカジカ5匹を仕留めている。先週も近浦に入り、先のプールでよい成績を収めたということである。さらに、その時は隣に並んだ釣り人が56cmのカジカを上げたと付け加えられる。荷物を取りに戻ろうと国道を歩いていると、海岸を眺めている御仁がいる。

「どうですか」

「この海の荒れようではさっぱりですね。上近浦に向かおうと考えていますが風が正面からまともに吹き付けていることでしょう。」

「私は近浦舟揚場のブロックの上で竿を出していましたが、お宅はどこで竿を出しています？」

「そこに見えるコンクリート階段です。溝が沖から入っているのですが駄目なので移動しようと思っています。」

「私は岩見沢釣遊会の鹿島です。どちらからですか？」

「熱心に『北海道の釣り』に投稿されている方ですね。私は『北の釣会』の沢田です」

「沢田隆郎さんですか。以前、貴方が書いた記事を頼りにここにやってきました。あの大きなプールに二人の釣り人がいますが、その真ん中に割って入ってよいものでしょうか？」

「普段の状況では入れないことはない間隔ですが、あのプールは二人が限度と考えて、自重したほうがよいでしょう。」

「今は溝が分からないので、明るくなって潮が引いてから溝を探しながら釣りをしようと考えていますがどうでしょうか？」

「明るくなってからのカジカはあまり期待がもてないですよ。暗いうちが勝負です。舟揚場から50mほど手前によい溝があるのでそこでやってみてはいかがでしょうか」

「この高潮の中、溝をどの様に見つければよいのでしょうか？」

「沖の方からの白波が消えて暗くなっているところをじっくりと探してみてください。岩見沢から札幌に来ていた釣りのメンバーは皆さん頑張っていますよ」

「ありがとうございます。我が会の佐々木秀美さんや岡 英成さんは旭覆道付近に入っているはずですがどうでしょうか？」

「佐々木忠義さんも下りましたが、この波では苦戦を強いられていることでしょう。まだこの近浦の方に釣り場があるとみるのが妥当でしょう」

主のいない竿の持ち主は『札幌北の釣会』の沢田隆郎氏であり、付近の釣り場の状況を懇切丁寧に教えて下さる。私の不躰な話にも温かく応じてくれ、そのちょっとした言葉や仕草に紳士としての標榜を醸し出している。私はとにかく沢田氏と話が出来ただけで嬉しい。私のことをご存知だったのがなお嬉しい。冷たい風もなんだか暖かく感じてしまうのがさらに嬉しい。幸せな気分がポーッとなるのも殊更嬉しい。痺れるような心地よさだ。

後家のカジカ

沢田氏が話してくれた溝を探すがイマイチはっきりしない。沢田氏くらいになると少しの波加減でも入り組んだ海の底を手取るように感じているのであろう。一応、溝だと思われるところに荷物を置き、中近浦まで偵察に出かける。舟揚場はどこも満杯である。釣り人一人一人に声を掛けて歩くと、皆1、2本のカジカを持っている。国道に張り付いた荷揚げ用の階段下に波が死んでいるところを見つけたので、荷物を取りに戻り、まずはその溝に打ってみる。が、魚は来ない。満潮時を迎えており高波が足下にまで押し寄せあずましくない。さらに、階段下の土管前に移動してみる結果は同じである。

もう一度、中近浦までの舟揚場を偵察する。先程は釣り人で満杯だった所に一カ所だけ空いている舟揚場がある。釣れないことに業を煮やして移動していったに違いない。あまり期待はもてないが、先客が撒いた寄せ餌に魚が集まっているとも考えられる。またまた移動して、そこに竿をセットする。磯舟を引き上げやすいようにと垂木が横に組まれており、大変足場がよい。高波も上までは上がってこない。しかし、荒波に揉まれて仕掛けが取られる。海藻がないのかハリスがスパッと切れる。舟揚場から海に向かって2本のロープが張られているのでそれをかわしながらの作業である。しかも、舟揚場に付いた横木に仕掛けを取られないように気を付けなければならない。

近投していた竿が海に向かってガクッと刺さった。イカゴロを口にはばけて35cm程のカジカが上がった。遠投していた竿が同じようにガクッと刺さる。これもカツオを喉の奥に飲み込んだ同じようなサイズのカジカである。カジカの喉奥に買ったばかりのペンチを差し込みハリを取り出す。何を間違えたかハリスまで切ってしまった。

綻んだ嵐氏の顔

キャップライトの明かりを必要としなくなった。帽子から外して仕掛けの繕いを直していると、「どうだ?」と声を掛けてくる御仁がいる。下近浦に入ったはずの嵐氏である。彼はハゴトコとアカハラしか釣れておらず、さっぱりだという。そして、そこに荷物を置いて上近浦方向に様子を伺いに行った。戻ってきた彼は、近浦舟揚場前の波が死んでいたのそこで最後まで頑張るといふ。

その後は私の方もさっぱりで7時半過ぎに、一度竿を入れた荷揚げ階段下に移動する。竿袋に竿を収めて移動し、8時前には1本目を打ち終えた。本日は40周年大会の催しを控えており9時終了となっているので動作が機敏になっている。近浦バス停前の湾洞では季節はずれの昆布拾いの磯舟が8隻ほど浮かんでおり、昆布根から離れた虫を求めて魚が動いているとも考えられる。期待に反して虫に寄ってきているのはハゴトコのみであった。

9時直前に道路に上がる。嵐氏は近浦に移動しているので、バスが待機していたエリモ港までこの先は誰もいない。嵐氏の所へ向かっている途中、案の定、バスが早めにやって来た。バスの前面に掲げてあるはずの釣遊会の黄色い旗がない。不安になり運転手を覗き込むと、気が付いて急停車してくれた。

嵐氏が乗り込んできた。心なしか顔が綻んでいる。聞くと、昆布取りの磯舟を避けながら少しずつ移動して歩き、そこからカジカ3本を仕留めたというのである。

審査結果

優勝	嵐 光博	1163点 (カジカ 420mm+アカハラ332mm+4110g)	近浦
準優勝	谷口良幸	956点	上近浦
3位	堀内正博	953点	幌島
4位	相馬義博	915点	鵜苫港
5位	山岸 伸	890点	上近浦
身長優勝	堀内正博	カジカ45, 8cm	幌島

私は823点(カジカ 356mm+ハゴトコ256mm+2110g)の7位であった。

釣遊会は7回の内5回の得点で年間入賞が決まる。過去6回の成績は

嵐 光博	7点	(① 15 ② 8 ③ ①)
鹿島釣狂	9点	(③ ① ③ ② 4 7)
堀内正博	11点	(7 ② ① ⑥ 6 ②)

であり、4回トータルでは嵐氏に抜かされてしまった。さらに後ろに堀内氏がヒタヒタと追尾しており、おしりに火がついた感じだ。

痺れるような

昼食後、項垂れてバスに乗り込むと、窓の下で島氏が私に向かって盛んに叫んでいる。彼の手には私の審査用のバケツがぶら下がっている。自分でも気が付かないほどの打ち拉がれようで頭の中が真っ白に痺れていたのである。

来月の大会範囲となる海を眺める。朝方まであんなに荒れていた天候が嘘のように治まり晴れ間も覗いている。海は薄いブルーを背景に穏やかに波頭が揺れて流れている。波は東へ東へと押し寄せられ、視界が尽きようとする辺りで一際高く、陽差しを受けて鮮やかに縁取られていた。底知れず深く、果て知れず遠く広い。海は喧噪感に囚われの我が身を痺れるような開放感で包んでくれる。

卯月紅葉の書物に「潮に踏ませて人にしや」とある。「辛酸をなめる如く世間の辛い目に遭うことで一回り人間が大きくなる」ということらしい。本日は自然の厳しさにも諦めないで最後まで努力を尽くした。結果こそ付いてこなかったが、このように「潮を踏む」ことが最後の大会で花開かせることになると信じたい。

40周年記念事業のため、静内温泉で一時的懇親を持った。疲れた体を湯船に横たえ、どっぷりと温泉に浸かる。『札幌釣道会』のメンバーが賑やかに談笑している。大会の後に温泉に寄るのはいつものことなのだろうか。そうだとすると羨ましい限りである。風呂上がりの脱衣所で話を聞くと三石漁港で58cmのクロガシラを上げたという。タモに入りきれず、頭だけ入れてようやく取り込んだということで痺れるような羨ましい話である。

祝宴では美味しい磯料理に舌鼓を打ちながらも、会長から再度「最終の大会でも40周

年に相応しい素晴らしいデットヒートを期待している」との挨拶をいただいた。当事者にとっては嬉しいような痺れるほどの話である。3年間準優勝に甘んじていた嵐氏が「今年こそは頑張るぞ」と年賀に記した言葉が俄然真実みを帯びて痺れるように迫ってきた。

【つれづれ】

当日の移動場所①～⑥



帰りのバスに乗り込むと運転手が頭を抱えている。運転手仲間からの情報では『交縁会』の若い会員が白泉で行方不明になったというのだ。海に落とした竿を回収するために舟揚場のスロープを下ったときに打ち寄せた高波にさらわれたらしい。ヘリコプターや救急車も出動して7時に遺体となって発見されたのである。対岸の火事と考えず自分のこととして戒めなければならない。

前野氏の話では彼が最後に入った東冬島舟揚場でカジカ50cmが何本も上がっていたとのことである。高い防潮堤からの釣りで、獲物を上げることは出来ず何度も舟揚場の方に回り込んであげたという。前野氏ははじめに入った琴似ですぐに型モノのカジカをとったので動けなくなったらしい。本日のように海が荒れているときは舟揚場や港に魚が入り込んでいることが実証された。

『札幌北の釣会』の沢田隆郎氏は近浦から旭漁港に移動し、51.5cmのカジカをあげ、1415点（1匹身長+10匹重量）で優勝している。北の釣会では防波堤での釣りが許されているとのことである。

